

曙光

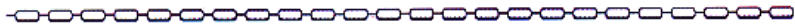


(しょうこう)

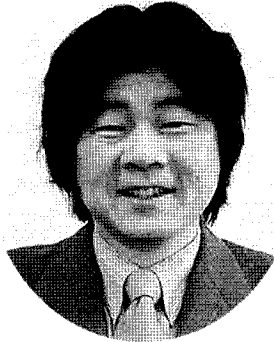
2003.10.1
東北大学全学教育広報 No.16



キャンパス風景



- ◎「近頃の学生」と教養教育
副総長（教育担当）大西 仁…2
- ◎教養教育に思う — 教える側の教養 —
大学教育研究センター副センター長
（理学研究科教授）工藤 博 司…4
- 退官（予定）教官から
- 歴史は雄大なるもの
— 歴史の研究と教育をめぐって —
経済学研究科教授 坂 卷 清…6
- 化石の戯言
情報科学研究科教授 生 出 恭 治…8
- 東北大学OBから
- 生涯教育の一環としての教養教育
東北大学名誉教授 渡 部 治 雄…11
- 専門バカにならない学生生活を！
仙台中央法律事務所
弁護士 青 木 正 芳…13
- ◎平成15年度全学教育科目授業日程……………16



「近頃の学生」と教養教育

副総長（教育担当） 大 西 仁

近頃の学生は

大学時代の友人に会うと、私が大学教師なので、「近頃の学生は、一流大学の学生でも、教養がないのではないか。」という批判をよく聞かされる。人間は歳をとってくると、昔を美化し、それに比べて近頃の事を低く見る傾向があるので、——「昔の富士山はあんなじゃなかった。」という落語の一節もある——聞き流せばいいような面もあるが、一方で、「近頃の学生は本を読まないよな。教養そのものに興味がないんだから、教養教育なんてやっても無駄だよ。」というような、簡単には斥けられないような意見が含まれていることもある。

そこで少しまじめに近頃の学生と教養について考えてみよう。但し、私は、教育学の専門家ではないので、これから論じる事は、極く狭い体験に基く印象論に過ぎない事を予めお断りしておきたい。

まず、「教養」の定義をしておこう。「教養」というのは多義的概念だが、単に個人が知識を備えているばかりでなく、個人が知識・素養を備えることによって、社会を何らかの意味で豊かにできるという場合に使われる言葉だろう。さらに、これからの若い人ということで、ここでは「社会」を「国際社会」としてみよう。そうすると、「教養がある」とは、国際社会に何らかの貢献をなし得るような知識・素養を有していること、と定義できることになる。

このように定義した上で、以下、近頃の学生は国際社会で貢献できるような教養を備えているのか、又、近頃の学生に教養教育を行うにはどうすればよいのかを見ていこう。

近頃の学生は国際社会に溶け込んでいるか

近年、外国の大学に出かけると、日本からの若い留学生を見かけることが多い。そこで感心するのは、彼等が他の学生達の中に違和感なく溶け込んでいるように見える点である。私が若い頃には、日本人留学生は、何となく周囲とチグハグな印象を与える事が多かった。それに比べて、近頃の日本人留学生は、身長をはじめとする体格が向上した上、身だしなみが自然で、又、顔の表情や身体の仕草が穏やかで豊かになり、外見上、周囲から浮いてしまうということが少なくなった。

それでは、そういう近頃の日本人留学生が周囲の学生と深い人間関係を結ぶのに成功しているのかというと、必ずしもうまくいっていない事が多いような気がする。例えば、大学の食堂で日本人留学生が学生の輪の中にいるのを観察していると、外見上は違和感なく周囲に溶け込んでいるにもかかわらず、その国の学生や日本以外の国から来た留学生に比べると、半人前にしか扱われていないという事が多いように感じられる。そしてこれは、仲間とおしゃべりをする時、その場にいる誰もが興味を持つような話題を提供したり、他の人が出してきた話題をより知的刺激に富んだものに発展させたりして、会話や議論を面白くする能力に乏しいからだと思う。

このように会話や議論をリードする能力に欠けていると、特に国際社会では、他の人間の信頼や尊敬を得る事は難しく、国際貢献などとても覚束ないだろう。これは、前に挙げた定義に照らして、教養がない、少なくとも、教養の中の大きな要素を十分に備えていない状態とみなす事ができよう。

そこで、なぜ、日本人留学生が、会話や議論をリードできないかを考えてみると、勿論、語学能力ということもあるだろうが、それよりも、日本社会にいた時から、会話・議論をリードする訓練を受けてこなかったということが大きく働いているのだと思う。それではどのような訓練を行えば会話・議論をリードできるようになるのだろうか。私は、(1) 若者が仲間同士の雑談の質を高める、(2) 大学の教養教育において学生が議論する機会を飛躍的に多くする、という二つが大事だと思う。

雑談の質の向上

近頃の学生の仲間同士の雑談の質は、残念ながら、大変に低いような気がする。身近にいる男女のカップルのうわさ話とか、就職活動で企業訪問した話とか、昨日観たテレビドラマの話というような話題について、ボソボソあるいはキャーキャーと情報交換して、それで終わってしまいがちである。身近な話題をとりあげるのはいいが、大学で学んだり本で読んだりして得た普遍的知識を生かして、身近な話題を、その場にいる仲間を超えた、普遍的に通用する議論にまで発展させるという事をしないのは、大変に問題である。おばあさん達が集まって、「隣村の与作の長男の嫁が、姑が大切にしていた茶碗をわざと割ってしまった。」という類の狭いコミュニティー内の情報交換に夢中になるのはほほえましいが、将来のある若者が、狭い仲間内の情報交換をダラダラと続けるのは何ともさびしい。

大学生諸君には、大いに本を読み、映画や劇を観て、音楽を聴いて、美術を鑑賞して欲しい。大学の教養教育で貪欲に知識を学んで欲しい。そこで得た知識を駆使して、仲間との雑談の質を高めて欲しい。それこそが、国際社会で会話や議論をリードするための最も基礎的な訓練になるのだから。

教養教育における議論の重要性

本来、教養教育というのは、孔子やソクラテスのやり方を見ても分かるように、対話や討論を通して行ってきたものなのだろう。ところが近代になって、学生が学ばなければならない知識が膨大となってしまったために、学校教育では、知識の伝達に力が集中されがちになった。特に日本では、明治以降、欧米先進国から知識を学ぶことが重要な課題となったので、そのような傾向がますます顕著になった。その結果、日本の学生は議論する能力を伸ばす機会が十分に与えられてこなかった。

しかし、国際社会で通用する教養を備えるとは、既に述べたように、普遍的知識を学んだ上で、その普遍的知識を生かして他の人間と質の高い対話・議論を行い、ひいては社会に貢献するという能力を身に付けるということなのである。したがって、単に知識を与えるだけでは教養教育としては不十分で、学生が習った知識を駆使して、議論する機会を設けて初めて完結するものだと思う。ゼミでは勿論の事、講義においても、知識の伝達を行ったら、その同一の講義時間内で、学生が今学んだ知識を駆使して議論するということが必要なのだと思う。

さらに、教養教育の授業が終わった後、コーヒーでも飲みながら、学生同士、できれば教師も加わって、今の授業で提示された普遍的知識・問題について、延々と議論を続けられたらと思う。欧米の大学には、大学構内に、議論に好適のカフェテリアやベンチや芝生があるか、さもなくば、周辺に、気兼ねなく議論を続けられるカフェが並んでいることが多い。日本の大学でも、長時間快適に議論ができる場を設けることを、教養教育の必須の条件と考えなければいけないのではないだろうか。



教養教育に思う — 教える側の教養 —

大学教育研究センター副センター長 工藤博司
(理学研究科教授)

大学の一般教養教育の重要性は広く認識されています。一般教育あるいは教養教育とも言われますが、本学ではこれを「全学教育」と呼び、総合大学の特色を生かして全部局の協力を得て進めています。全学教育は、昭和24年の学制改革以来本学の一般教養教育を担ってきた教養部が平成5年3月に廃止されたのを受けて、同年4月に始まりました。その後の見直しや改革を経て、平成14年から現在の体制で実施されています。その目的は、全学教育改革検討委員会報告（平成12年4月18日評議会承認）に次のように記されています。

「本学の全学教育は、①現代人として生活し、また専門を学ぶ上で共通の土台となる素養と技能、②人間形成の根幹となるような現代社会にふさわしい基本的教養や技能、③専門教育および大学院教育を受けることができ、またこれらを通じて将来専門知識を応用できるような科学的知識を養い、これにより、専門的知識を実社会や高次の研究に生かせる現代的で広い知見と豊かな人間性、国際性を身に付けることをねらいとする」。さらに、「本学の全学教育は、専門教育や大学院教育への展開を視野に入れて、研究科・研究所等で高度な専門研究にたずさわる者が直接に行う」とあります。本学は全学教育において学生に教養と基礎学力を身に付けることを義務づけ、そのための場を提供することを約束している訳です。

総合大学である本学には、幅広い専門分野に一流の教授陣が揃っていますので、基礎学力の養成に関しては殆ど問題ありません。しかし、教養教育となると事情は少し違います。教養とは何でしょうか。私たちは普段、「教養がある」、「教養が滲み出る」、「教養が邪魔する」などの言葉を口にしますが、改めて問われると答えに窮します。そもそも教養とは、独立した自由人にふさわしい知識や技術という意味で「リベラルアーツ」に発し、その思想の源流は古代ギリシャにまでさかのぼると言われています。この考えは中世ヨーロッパの大学の伝統的目標であり、日本では旧制高等学校の教育目標でもありました。その目的は、俗世間を超越した高德の士を養成することにあつたそうです。私自身このことはよく理解していませんでしたが、本年2月に開催された全学教育公開講演会で大西副総長の講演を拝聴して認識を新たにしました。大西先生はさらに、時代が変わった今、本学の教養教育によって養成するのは、「社会のリーダー（社会で有為の人材）」であって「高德の士」ではないと言っておられます。

全学教育を教養教育の面から眺めてみると、専門にとらわれることなく学問全般に触れさせ総合的知識を育むとともに、社会のリーダーとしての義務と責任を自覚させ、倫理観や歴史観を身につける機会を学生に与えることとなります。このような観点から、実際の全学教育課程では、学生が文系に属するかあるいは理系に属するかを問わず、選択して必ず履修しなければならない基幹科目類に人間論、表現論および学問論を設けています。人間論群には歴史論、思想論および文化論が用意され、現代社会に生きる豊かな人間性と倫理観を備えた人材の育成をめざしています。表現論群の中には文学

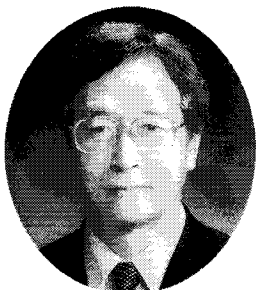
論、芸術論および言語表現論があり、自己の考えや発想、さらには知的成果を文章や芸術的手法を通して他者に伝える手法を学びます。

学問論群は現代学問論、自然論および科学論で構成されています。これらの科目の狙いは「学問の歴史や人と自然の関わり」を学び、専門教育で自らが学ぼうとする学問の位置づけを確認することにあります。学生がそれぞれの学部を選んだ動機を再確認し、専門教育への意欲の喚起を期待しています。この中で特徴的な科目は現代学問論です。本学の様々な専門分野で長い間学問に打ち込んで来られ、定年を控えたベテランの先生に担当していただいております。経験豊富な先生方がどのような動機でそれぞれの学問領域に入り、どのように研究や教育にたずさわって来られたかを情熱をもって語ることが学生の興味を駆り立てるようで、大変好評です。まさに教養教育の目的にかなった科目と言ってよいでしょう。

自然論と科学論も高い目標を掲げる教養科目です。しかし現実には、その目標に達するためには改善すべき点が多々残されていると思います。私自身、理学研究科が提供する自然論の講義の一部を担当しましたが、教養教育として学生にどのように伝わったのか心配です。自然や科学の専門的な事柄を教えることはできても、「論」としての講義を組み立てるまでは至りませんでした。教える側の教養が試される思いでした。専門の学問領域に精通しているだけでは、学生にとって必ずしも魅力ある授業にはならないと感じたのは私だけでしょうか。大学人としては、日頃から“自然の成り立ち”や“科学の在り方”などを広い視野に立って考えておかなければなりません。専門分野の研究に追われる毎日の中では、なかなか「論」を練り上げるまでの余裕がないのも現実です。実際、本学では体系立った自然論や科学論を担当できる教員は限られると思います。せっかく設けたこれらの教養科目ですから、一案として大学教育研究センターに自然論や科学論を研究する専門家を配置して、中味の濃い授業ができる体制を整えてはどうでしょうか。最近重要視されている「ジェンダー論」を担当する教員の確保も課題の一つです。

大学教育研究センターは全学教育を支援する組織と位置づけられており、全学的視野から全学教育の研究を行い、内容と実施システムの改善に寄与することを使命としています。しかし、前述のような教養科目の抱える課題を解決するためには、同センターの専任教員の数は必ずしも十分とは言えません。昔の教養部には、教養教育に熱意と誇りをもつ「名物教授」といわれる先生が大勢いて、「教養が滲み出る」名講義をされていたように思います。教える側に教養を身につけるゆとりがなければ、稔りある教養教育にはならないのではないのでしょうか。国立大学の法人化によって競争が激化し、専門分野における研究業績が問われる機会が増えることは必至ですから、ますます余裕がなくなる恐れがあります。時代の流れを考えると、同センターがリベラルアーツに取り組むゆとりと余力を備え、名実ともに教養教育の核になって欲しいものです。「ミニ教養部」をつくることになるとの反論があるかも知れませんが、決して時代逆行ではないと思います。学生の修学や進路指導を充実させるためにも、全学教育を支える同センターの拡充を望みます。

退官（予定）教官から



歴史は雄大なるもの

— 歴史の研究と教育をめぐる —

経済学研究科教授 坂 巻 清

世界を把握したい、歴史はどのように展開したのか、何によって動いたのか。こうした問題を追求したいというのが、大学に入学した頃の私の願望であった。経済史は、世界歴史の背骨をなすとの思いで、イギリス社会経済史の研究に向かったのだが、その周辺分野をも含めて、大学1、2年次に読んだ100冊たらずの様々な本が、私にとって決定的ともいえる意義をもった。

その痕跡を残してであろうが、私は学問、といっても社会科学の根幹は、それに関わる諸現象の抽象化・一般化、そして普遍性の追求にあると考えている。最終目的は現状の把握であるとしても、社会、経済の原理の探求こそ学問としての社会科学の最も重要な本来的な課題であると思う。そうして得られる成果は、長い生命力をもっている。A. スミスの利己心と社会的正義の問題は200年余の時空を超えて今日の課題でもあるし、K. マルクスの資本論も少なくとも100年余の命脈を保った。M. ウェーバーの支配の社会学は今日なお引用に値するし、F. ブローデルやI. ウォーラステインの歴史把握にも骨太の基本的枠組みがある。もっともウェーバーの場合は最終的には個性的な個体把握を目的として、社会科学のもう一つの側面を示しているのだが、彼の理念型は認識の基準としての一般性を持ちうることはいうまでもない。

しかしこのように言うと、抽象論議が現実の社会にどれだけ役立つのか、社会貢献できるの

かという声があがってくるであろう。しかし、私は教養教育では、直接的な社会貢献はあまり気にせず、社会・経済の原理への関心を養い、また歴史などこれまでの豊かな蓄積のある基礎的な学問分野をしっかりと学んだほうがよいと思う。ちなみに、日産自動車のリストラによって再生させ、今その名を馳せているカルロス・ゴーン社長は、歴史が大好きで、少年時代から古代、中世、現代にわたる歴史書を読み、歴史の先生になるのが夢だったとその自叙的著作に書いている。また同氏は今なお歴史の講師になる望みを捨てていないとも聞いている。ゴーン氏の歴史の素養が、日産の再生リストラにどのように役立ったのか、私は知らない。しかし、私の経験からすると、総じて教養に裏付けられていない発想は、短絡的であったり、近視眼的であったりしがちである。社会に対し即効性のある教育ももちろん必要だが、教養教育・基礎研究に裏付けられない限り、はなはだ浅薄なものにならざるを得ない。そして、国立大学が今後さらに、社会貢献しなければならないにせよ、教養教育・基礎研究の分野は、私立大学では容易に推進し難いところがある以上、その充実発展は法人化後も国立大学の使命、とりわけ「研究中心大学」の使命として重視されるべきである。

ところで、私が大学入学当時いただいた、歴史を動かすものは何かという問題は、その後どうなったであろうか。定年を目前にして、この間

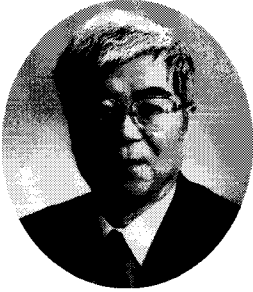
題を改めて考えると、誠に心もとなく、これまで何をやってきたのかとの思いにもとらわれる。先ほど名前を挙げた社会科学の偉人・達人達の歴史観は、それぞれに面白く共鳴しうるものがあり、これらのいずれかを挙げて済ませるとすれば、ことは比較的容易である。しかし、自分が専攻したイギリス社会経済史に即して、自分で納得した限りでこの問題に答えるならば、どうなるだろうか。

ここで思い当たるのは、長期の歴史において、人々のボランティアな力こそが国家を動かし、歴史を動かしたということである。これすら、G. アンウィンなる経済史家の轍の跡を踏みつつ、とりわけイギリスについて述べることなのだが、彼はドイツ歴史学派の国家の政策中心の経済史学を転換させ、その対極にある個人の社会・経済活動を重視した。その際、イギリスにおける個人の活動は、国家が個人に干渉することを防ぎ、個人の力を集めて、むしろ国家にプレッシャーを与える中間団体＝自発的結合組織（ボランティア・アソシエーション）を結成する。中世以来現代にいたるまで、こうした自発的結合組織は、たえずイギリスの商工業者、地域住民の間から、発芽し発生してきた。ギルド、相互扶助団体、各種のカンパニー、都市、各種改良団体、労働組合、慈善団体等々のほか、最近のNGO組織も含め、イギリスの歴史は多種多様なボランティア・アソシエーションに満ちあふれている。個人は結局こうした中間団体を通じて活動してきたのであった。しかし、個人やボランティア・アソシエーションが、そのみで活動するならば、世の中は無秩序なアナキー状態に陥らざるを得ない。こうした個人や中間団体の活動に秩序と方向性を与えるのが国家である。

しかし、こうした国家の立場からすると、ボ

ランタリーな団体の中には、当初は国家的な承認を与えることができないような非合法的な団体も多い。例えば、クラフト・ギルドは当初は不当な職業統制を行う独占団体として王権によって禁圧されていたし、団結禁止法下の労働組合などもその良い例であろう。しかし、現実の社会・経済が、そのような団体と個人の活動を必要としているのであれば、国家がそれを禁圧しても禁圧しきれものではない。結局国家はそうした団体の存在を容認し、やがては公認せざるをえない。さらに単なる公認からそれを国家的な制度、機構のうちに取り込みその一部とする、あるいはかつての非公認・非合法的ボランティア団体が、国家の中枢部にまで進出するような事態すら生じたのである。こうした非公認ボランティア団体の公認→制度化→国家行政・中枢との一体化といった上昇転化現象は、ここでは詳述できないが、中世以来現代に至るまでのイギリスで、波状的に幾重にも発生したのであって、それは国家の在り方を変えてゆく方法でもあった。つまり、ボランティアな力が国家を引っ張り、歴史を動かしたのである。他面、もちろん国家の政策が局面打開に決定的な重要性をもつこともある。とりわけ後発国ではそうなのだが、国家が主役である場合に比し、個人の自由は、ボランティア団体の上昇においてこそよりよく実現されると言えよう。

歴史は人間経験の宝庫であり、教養教育に最もふさわしい学問分野の一つである。歴史は暗記物などと言っている者がいるとすれば、その人物の歴史認識のレベルが問われる。歴史から何を引き出すかは、これに向かう主体にかかっているからである。私のみるところでは、歴史のなかに普遍的な因果性を、より深くまたより広く自覚できればできるほど、歴史は雄大なるものとして立ち現れる。



化石の戯言

情報科学研究科教授 生出 恭治

もう40数年も前のことになるが、大学に入学したばかりの頃のことが今も鮮明に思い出される。初めてクラスのコンパに出た時、同級生の自己紹介に度肝を抜かれた。まるで別世界のことであり、“Sturm und Drang”（疾風怒濤）の始まりであった。大半が何を専攻するかもう決まっていたし、相当数が「大学院」に行くと言う。ド田舎の分校育ちで、野山を駆け回り、野球に明け暮れるだけで、机に向かう習慣のなかった私は、既に痛い程埋めようのない学力差を感じていた。それだけならまだしも、色覚異常で学部にも専門にも希望や選択の余地がなかったし、何を専攻するかなど決められるはずもなかった。まして「大学院」などと言われても「それ何？」と言うしかなかった。隣にいた同級生に恐る恐る聞いたら、「お前も馬鹿だな」と一蹴されてしまった。身のおきどころのない大学生活のスタートであった。

学部を終える時に高校の校長さんから誘って頂いたが、友人達が大学院に行くというので一緒に受けてみたら、私の方が受かってしまい、その後、先生に勧められるまま、早く就職させたい親に勘当されそうになりながら、いい気になって一人だけ後期課程に進み、結局先生に勧められた大学に何となく勤めることになった。

これ程いい加減な生き方はない。以後、今日まで、学生諸君や、事務の皆さんを含めた同僚の方々に多大なご迷惑をおかけしてきた。人は自らの生き様と無関係にものを言うことはできないし、こんないい加減な生き方をしてきた人間の言うことは独りよがりになっているから

である。それを承知の上で、求められればお断りすることもならず、30数年間にわたって性懲りもなく持ち続けてきた、化石のような愚見を蔵出しして大学生生活最後の恥の上乗せをせねばならない。

1・2年生と30年以上もつきあっていると、時代の変化を感じ取るアンテナになったような気になる。だから、これから申し上げるようなことは、古色蒼然たる考えだ、と笑われるに決まっているのはわかり切っている。しかし、それを承知で、逆に、こんな時代だからこそ学生諸君には「何となく」ではない生き方を探して欲しいと願う。「決められている」のであれ、「決めている」のであれ、それに満足しているのなら、それこそ余計なお節介というものであるが、大学で生活することになったのを機に、もう一度自らに問い直し、何かを求めて解体から再構築への道を模索してみるのも悪くはないのではあるまいか。

人にはそれぞれに自らを活かす道が必ずあるはずだと私は信じて疑わない。目を見開いて見さえすれば、求める心がありさえすれば、新しい世界がいくらかでも見えてくるはずだし、興味のあるもの、面白いものが次々に見つかるはずである。1つ見つかってそれに取り組めば、これまで見えなかった広い世界が見えてくる。その連鎖のなかで、のめり込み、夢を追いかけて、寝食を忘れて取り組む。それが、若い内だからこそできる、何よりも大切なことではないだろうか。

極論すれば、他人様から教わることなど単な

るきっかけでしかない。「教育とは教えられたことをきれいさっぱり忘れた後に残るもの」(“Education is what remains when we have forgotten all that we have been taught.”) (G.Savile) という言葉がある。英語の教師失格だが、面白いから、思いっきりねじ曲げて、「まるでテープレコーダのように、inputされたことがそのまま output されるようではもはや教育とは言えない」と解釈しておこう。近年いい試みも少なくはないが、反面では、やけに「役に立つ」とか「実践的」というお題目が教育の世界を席卷しているやに見受けられる。その必要性を否定するつもりなど毛頭ないが、騒ぎ過ぎて大事なものが見失われてしまうとしたら事は重大である。

カリキュラム上の「教養」は即“culture”ではないが、もし「教養」とは何かと問われたら、「自らの土壌を耕して肥やすこと」と応えたい。“culture”は語源上“cultivate”と無関係ではないからである。カリキュラム上の「教養」であればしばしば“Liberal Arts”が充てられるが、かつてイギリスで行われていた“Liberal Arts”教育はアメリカにわたって大きく変質し、それが戦後の日本にも輸入された。歴史意識の薄い日本に何かが外国から入ってくると、私のような半可通は、その受け止め方に大いなる疑問を抱いてしまうことがある。戦後の一時期から暫く「文理学部」という名称の組織があちこちにあったが、これはどうやら“Arts and Sciences”を「誤訳」したものらしい。もしそれが事実ならお粗末と言っただけでは済むまい。ほぼ似たような“Liberal Arts”にしても、歴史的な面を含めて果たしてどこまで正當に理解されているのであろうか。学問を云々するならそれと合わせて、あるいは、学問を云々する前に、“Liberal Arts”とは何かをその前提として改めて考えてみる必要があるのではないだろうか。老人のお節介とはまことに

困ったもので、anachronism（時代錯誤）もいいところであるが、多少イギリスの伝統まで引き継いでいるのではないかと思われる“Liberal Arts”に関するアメリカの例を1つ紹介しておこう。

歴史的に見ると、教育に何か大きな変革が求められて教育論議が盛んになる時には、どうもある種の共通点のようなものがあるような気がしてならない。教育がけたたましく云々されるのは教育にまだ信頼が残されているからだとも言えるが、一方では、つけを教育に回して“scapegoat”（「身代わりの生け贄」）にしているのではないかとあらぬ疑念を抱いてしまうこともない訳ではない。歴史のつけと全米を揺るがすような内部からの激しいうねりがあって、1960年代のアメリカはまことに不安定な時代だったが、この頃もう既に大学教育の危機が叫ばれ、教育論議が大変盛んだったようである。時おりしもシカゴ大学が創立75周年を迎え、大学をあげて記念シンポジウムを開催することになった。いかにもアメリカの大学らしく、“Liberal Arts Conference”と銘打った、“Liberal Arts”をテーマとするものであった。その基調講演を行ったのが W.C.Booth 教授で、その最後を次のように締めくくっている。

「真・美・善（「正しい選択」）」は、大学のどんな学部における研究にも相応しいものである。例えば、美・想像力・芸術と言ったからとて、人文科学が独占して研究するものではないし、思索的真理と言ったからとて、いろいろな科学の分野だけのものではない。さらに、シェイクスピアやアリストテレス、ベートーベン、アインシュタインさえ知らないとしても、一人の人間たり得る。ただし、自らの考えを持ち、美を受け止め、自らの行うべきことが見定められるようになっていければの話であるが。何か知ろうとすることを外から決めつけてしまったり、これだけ知ればいいと言ってみたりするの

は、大学のやるべきことではない。そんなことをすれば、押しつけられたものに憤慨するのは当然である。ひょっとするとすぐその場で、ひょっとすると押しつけられた知識が時代遅れになってしまった10年後に。思うに、大学が為すべきことは、少なくとも、先に申し上げた3つの面で、どうしたら [思考・感情・意志等の働きをする] 心の営みが自立してできるようになるかを学ばせる手助けをすることである。

（“Truth, beauty, and goodness (or “right choice”) are relevant to study in every division within the university; the humanities, for example, have no corner on beauty or imagination or art, and the sciences have no corner on speculative truth. What is more, a man can be ignorant even of Shakespeare, Aristotle, Beethoven, and Einstein, and be a

man for 'a that--if he has learned how to think his own thoughts, experience beauty for himself, and choose his own actions.

It is not the business of a college to determine or limit what a man will know; if it tries to, he will properly resent its impositions, perhaps immediately, perhaps ten years later when the imposed information is outmoded. But I think that it is the business of a college to help teach a man how to use his mind for himself, in at least the three directions I have suggested.”)

（“Is There Any Knowledge That a Man Must Have?” (W.C.Booth)

生涯の心の灯として、全学教育よ、永遠なれ！
妄言多罪。

東北大学 OB から



生涯教育の一環としての教養教育

東北大学名誉教授 渡部 治 雄

昭和27（1952）年、東北大学受験を前に文系か理系か大いに悩んだ経験がある。当時、一般入試の前に進学適性検査という一種のメンタルテスト的な試験があり、問題が文系と理系に分れていた。この点数で「足切り」をし、一般入試の受験者を制限する大学もあり、私の母校でも高校三年生を対象に適性検査の本番に備えた3回の校内模擬試験があった。歴史が好きで文系志望だった私は、試験ではいつも理系の方の得点が高く、迷った末に入試直前に後ろ髪を引かれる思いで文学部受験を決めた。

教養部では理系の4科目を受講したが、寮で同室だった文学部の先輩にならい、その予習や復習は全くせずに、語学の勉強と人文的教養書を読むことに集中した。理系の個別科学の授業にもそれなりに真面目に出たが、文学部生なのだから文系の勉強に力を注がねばならないと自分に言い聞かせ、せっかくの授業にもやや義務的な出席に終始したように思う。旧制二高の理科を出て本学で哲学を学ばれたH教授担当の「自然科学概論」の授業だけは、先生自らが講義用のテキスト（『自然科学思想史』古代・中世の部と近世の部の2冊）を作るなど工夫をこらした授業だったが、他の先生方には、授業方法の改善などという発想はなく、「文学部生はここまで憶えればよいでしょう」などとおっしゃる言葉にとまどうこともあった。

残念ながら時間割の都合で物理を受講できなかった。物理を自分で勉強するようになったのは、歴史を勉強するようになり歴史「法則」と

か歴史「認識の客観性」などという方法論について考えざるを得なくなってからである。「自然科学概論」の授業もニュートン力学までで終わっていたため、ニールス・ボーア以後の量子論やハイゼンベルクの「不確定性の原理」などは、私には文字通り「未踏の」分野であった。市販の書物による我流の勉強だったから、正確に理解できていたのかどうか甚だ心もとない。私が勤務した教養部には幸いに物理の先生方が多数おられたので、よく昼休みに物理の合研でコーヒーを頂きながら耳学問をさせてもらった。

系統的に学ぶには大学に入り直すか、科目履修生となるのが一番だが、それも出来ない私は、当分読書による勉強で満足するほかない。愛読しているのは数多い市販本の中でベテランの先生方の筆になる放送大学用のテキストである。しかし読み易い反面、「わかったと思うことの怖れ」を感じることなく表面的な理解のまま読み進む、ということにもなる。考えさせるには悪文も効用ありと言うべきなのか。大学進学とともに理系の勉強を断念したことの反動として、最近では本学出身の佐々木力氏の『科学革命の歴史構造』などを手掛りに、朝永振一郎氏の『量子力学的世界像』『量子力学と私』や佐藤文隆氏の啓蒙書など手当たり次第に本を買い込み、拾い読みしている始末である。

在外研究でゲッチンゲンで暮した折、週末に電車で史跡を見て廻った（運転ができない私はこの時ほど不便を感じたことはない）。ある時、前の座席で週刊誌のクロスワードに熱中してい

た年配のご婦人から「アンテナを発明した日本の学者の名前を教えてください」と声をかけられた。「八木です」と答えると笑顔で丁寧に礼を言われた。仙台市民の何パーセントの人が八木・宇田アンテナのことを知っているのだろうか、と反射的に思った。

文系学部卒業生である私だけでなく、日本の現役の文系学生の自然科学的教養が欧米に比べ格段に劣っているといわれる。それだけでなく、日本の理系学生の人文的教養と比べても、レベルが低いのではなかろうか。原因はもちろん学生側にもあろうが、進歩のスピードが大きい自然科学にも拘らず、大学の教養教育としての理科教育がせいぜい19世紀末あるいは20世紀初期までの研究水準を紹介したものであったこと、旧教養部の先生方も科学史を踏まえた先端的研究をわかり易く教える工夫を怠ってきたことが主たる原因なのではないか。東北大学在職中、「現代科学の発展が旧来の宇宙像や物質観をどう変えたか、大学はこういう問題を考える基礎的素養を教授する工夫を怠っているのではないか」などと、門外漢の気安さもあって教養教育担当の先生方に無遠慮な議論をふきかけたものである。もちろん、しっかりした基礎的素養が所与として備わっていても、私たち文系出身者が確かな自然科学的教養を身につけるためには、それなりの事後学習が不可欠である。およそ事後学習、正確に言えば生涯学習なくしては生きた教養はあり得ない。あるいは不断の自己陶冶への努力なくしては生きた教養は身につかないというべきであろう。

星宮前副総長など関係者の尽力で教養教育が内容・方法・実施体制の面で全面的に改革されたことは新制大学発足以来の画期的な出来事であった。明治以来の学問区分を踏襲した授業科目が脈絡なしに羅列され、授業の内容や方法も教官の全くの裁量に委ねられた旧来のカリキュ

ラムが、生涯学習という視点をも取り入れた新しい内容へと変貌した姿を前にして、「新しい皮袋には新しい酒を」と思いつづけた往時をふり返り、いささか感慨なきを得ない。

最後に理系学生の教養教育について一言することをお許し願いたい。複眼的な幅広い視野、これが教養の重要な要素だとすれば、理系学生にとって絵や音楽や宗教など、理系の学問とは対極的とも言うべき価値を表現する分野を積極的に学ぶことが大事なはずである。「宗教」については、旧教養部以来、文学部と他大学の先生方の骨を惜しまない協力を得て授業科目を設け、また平成5年に全学教育体制が実現したのを機に、優れた研究成果で知られる文学部のインド学仏教史講座の先生方の努力により「インド学入門」を開設することができた。この点で本学は国立七大学（旧七帝大）の中で特に恵まれた環境にある。今度のカリキュラム改革において、『大学教育研究センター年報』（第10号）の中で優れた音楽家として知られる佐藤泰平氏が授業の目的と計画、授業の展開について詳しく報告しておられるように、「音楽」の授業が本格的に摂り入れられたことはまことに喜ばしい。このことは文系と理系も区別はないわけであるが、現代の若者に支持されているジャズやロック、あるいはポップスにいたる現代の音楽が音楽の歴史の中でどのような意味をもつのか、その時代性や風土性を含めて学問的に理解しようとする態度も要請されるであろう。いずれにせよ、理系の各学部学ぶ学生諸君がこれらの授業によって、各人が生涯にわたって学び続けるための基礎的素養を身につけることができるようにと、切に願う。

以上、編集者の言葉に甘えていささか私事に傾斜した文章になったことをお詫びし、永い間お世話になった東北大学の教養教育のさらなる発展を願いつつ私見を述べさせていただいた次第である。



専門バカにならない学生生活を！

仙台中央法律事務所 弁護士 青木正芳

脳外科の新進気鋭の医師と評価されている青年の離婚問題に、その妻からの相談で関与した時のことである。

その青年の主張には、およそ、女性の立場、そして妻の人格を尊重する発言は見られず、この人は、周囲の人々の人格をどのように考え、接しているのであろうかとの疑問を強く感じざるを得なかった。

そして、ふと、この医師は、自分が手術する患者の人格をどのようなものと理解し、その患者にどのように術前の説明をしているのだろうか大きな疑問を持ったのである。

何回かの話し合いの結果、離婚問題は解決したが、その過程で彼が人間的に過ちを犯していたことに気づき反省してくれたとは必ずしも思えなかったことが残念でならない。

最近、知人がガンの末期症状に逢着した時、それを告知した後の医師の患者に対する態度が、あまりにも非人間的なので、その上司にお願いし、医師の交代をしていただいた事例があるが、優れた専門的知見も、それを支える人間性豊かな人格がなければ、ただの専門バカにすぎないのではないかと思うのである。

すぐれた専門的知見を有していても、それを裏付ける豊かな人間性を身につけていない人を私は専門バカと言いたいのである。

振り返って、自分の20代の頃弁護士としての離婚問題の処理を考えてみると、60代の男性が、長年妻と折合いが悪く、別居生活が続いていた事例での終止符を打つ話し合いに、今考えると机上の知識だけで切り過ぎていたのではなかった

かと反省させられ、私もまた、専門バカでなかったのかと考えざるを得ないのである。

死刑冤罪事件の法廷で、死刑判決を支える血痕鑑定を担当した著名な法医学者を尋問した時、血痕鑑定の手順について、自分の著書の内容とも矛盾する手法を使ったことについて切り込んだ。その時彼は、捜査当局が、そのような条件を示したから、その下で鑑定しただけだと苦しい証言に逃避し、自分が誤った死刑判決に手を貸したことの責任を回避しようとした。それであるならば、捜査当局から示された前提条件の問題性を科学者として何故指摘しなかったかとの問には、それは、自分の権限外のことであるとさらに逃げた。この態度の中には、自分の科学的知見を誰の求めに応じ、どのように使おうとしているのかとの点についての思考は全く欠けていたとしか言いようがないものであった。

誤った死刑判決を破るための鑑定をされた他の法医学者は、自分は、絶えず、自分の科学的知見を、人権を守ること、誤った裁判を生まないようにすることに奉仕する意識で、鑑定に取り組んでいると証言されたことと際だった対照を示していたことを忘れることができない。

専門性を支える人間性の重要性を示す対照的な法医学者の姿勢・思考の違いである。

一昨年、ボストンやサンフランシスコに法曹養成制度の調査に行った。必ずしも有名でないロースクールで、その学生の多彩さに驚いたことがある。医療機関で働いていた人、福祉施設で働いていた人、警察官だった人、市役所職員

だった人、会社勤務を辞めた人、商店経営を兄弟に譲って入学した人などなどである。

この人々は、働きながら自分の生き方を考え、改めて学費を貯え、学資ローンを使い、専門性を身につけようとしていた。この姿は、専門性を支える豊かな人間性を築く努力をしながら専門性の修得にはげんでいる姿でもあり、改めて感動させられたのである。

ロースクールの最終段階では、弁護士に伴われ、実際の法廷にも立つのであるが、優秀なのは、ハーバードだとかバークレーの学生だけとは限らないという話を聞いていたが、この人々と話し合っただけでこの話が本当であると実感もし、納得もできたのであった。

おそらく、この人々の中には専門バカは少ないのではないかと思われた。

この専門バカにならないようにするため、特に大学1・2年の時間は大切に使って欲しい。この時期、どのような友人を作り、その人々とのような本を読み、そしてよき先輩、よき先生との交流をどのように持つかによって、その内容の充実度は大きく変わってくるものと思う。

そして、それはとりもなおさず、専門性を支える豊かな人間性の形成への蓄積にも繋がっていると思われるからである。

今、わが日本で取組まれている司法制度の改革では、市民の司法への参加の制度として「裁

判員制度の創設」が検討され、まもなく法案化されるまで進んできている。

先進国と称せられるG8の国々の中で、司法に市民が参加していない唯一のわが国でも、戦時中、停止されたままになっている「陪審制度」に代えて、新しい独自の制度の創設が計られようとしているのである。

この改革についても、裁判は専門家に委せておけという意見が聞かれることも決して少なくない。しかし、この裁判の中における事実の確認の仕事は、専門家でなければできないことではないといった点なども含め、違った意味で批判されなければならないことである。

それはとも角として、改革の取組みの一環として、日本でもロースクール制度が創設され、大学の各学部で学んだ人々や、社会人として活動している人々が、改めて法曹の道をめざすことが期待される制度が作り出されたのである。

この制度が、人間性豊かな多くの法曹を生み出す制度に育って欲しいと思うと同時に、これを契機として、大学の中で学生が真に専門性を生かす生き方について、十分に検討し合う生活を目ざすことを期待したいと思っている。

一昨年、私の講義を聴いた或る工学部の学生が、法曹の途を考えてみたいと言っていたが、彼がその後、どのような学生生活を送っているのか大いに気になることでもある。

「曙光」(しよこう) の由来について

曙光とは、朝の太陽の光であることは、説明は不要であろう。

ドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェは、キルケゴールと共に虚無主義者と呼ばれる。然し、私は彼等を虚無主義と呼ぶのは誤っていると考えている。原本を読まれば直ちに判ることであるから此処には書かない。ニーチェであれば「ツアラツウストラはこう語った」あたりが分り易いと思う。

人間は妄執にとり巻かれている。今日の妄執の第一は偏差値であろう。諸君らの憎き偏差値は、君らの能力を示していない。例えば、岩波新書「天才」宮城音彌先生著を読まれたい。他にも類書は数多くある。

君らの周辺に信ずべきものがあるのか。次から次へとニーチェは粉碎してしまう。もうやめてくれと云ってしまう程、何でも打ち壊す。考える輩はつよい。何でも突き破る。これがニーチェの著曙光である。然し、或る日、遂に壊れないものを見出す。そしてツアラツウストラ、つまり、君は、意気揚々と山を降りて里に向う。その君を照らすのが曙光である。若い君の力を輝かすように太陽はやさしい美しい光を君に注ぐのだ。

諸君、壊れるものをすべて壊し、本当に壊れないものを君の心の中に把め、それも、すぐ壊れてしまう。それが壊れたらすぐまた、本当に壊れないものを夢中になって把め、そして、本当に曙光を浴びる強い、あるいは、たをやかなる若人になれ。

(命名及び表紙題字) 元東北大学総長 西 澤 潤 一

平成15年度全学教育科目授業日程

| | |
|--------------------|-----------------|
| 10月1日（水）～12月22日（月） | 第2・4セメスター授業 |
| 10月14日（火） | 履修カード提出期限 |
| 10月14日（火） | 履修科目届提出期限 |
| 11月1日（土）～11月4日（火） | 大学祭（11月4日休講） |
| 12月24日（水）～1月9日（金） | 冬季休業 |
| 1月13日（火）～2月3日（火） | 第2・4セメスター授業 |
| 1月16日（金） | 大学入試センター試験に伴う休業 |
| 2月4日（水）～2月17日（火） | 補講 |
| 2月18日（水）～ | 学期末休業 |

平成15年10月1日発行

編集 東北大学全学教育審議会広報編集委員会
坂本尚夫 全学教育審議会委員長
工藤博司 全学教育審議会副委員長
瀬川昌久 東北アジア研究センター 教授
小松正志 歯学研究科 教授
小林典男 金属材料研究所 教授
葛生政則 大学教育研究センター 助教授
富田真 大学教育研究センター 助教授

発行 東北大学全学教育審議会